

## リメディアル学習者の英語習熟度と英語文法熟達度調査

中條清美\*, 横田賢司\*, 長谷川修治\*\*, 西垣知佳子\*\*\*

Identifying the General English Proficiency and Distinct Grammar  
Proficiency of Remedial Learners*Kiyomi CHUJO\**, *Kenji YOKOTA\**, *Shuji HASEGAWA\*\**  
*and Chikako NISHIGAKI\*\*\**Keywords: Remedial English, English Proficiency Test, Grammar Proficiency Test, School Grammar,  
Junior and Senior High School Textbooks

## 1. はじめに

文部科学省は2002年に「英語が使える日本人のための戦略構想」を打ち出し、日本人が目標とする具体的な英語力の指標として、中学校卒業生の平均が英検3級程度、高等学校卒業生の平均が英検準2級～2級程度の英語力を備え、大学卒業時には「仕事で英語が使える」英語力を達成するという目標を示した<sup>1)</sup>。小野他(2005)の大規模な調査によると<sup>2)</sup>、ある県で、中学3年生ほぼ全員に実施した英検のプレースメントテストの結果では、英検3級の合格者の割合は20%を割り込んだ。また、同様のプレースメントテストを全国の大学生に実施した結果では、国立大学の学生と私立大学の英文科学生を除くと、在籍者の半数以上は英検3級または4級程度の英語力という大学が多いことが報告された。大学での英語授業を成立させるために、目標レベルに達していない、このような英語が不得意な学習者、すなわち補習が必要な「リメディアル」レベルの学習者(以下、リメディアル学習者)に対する「リメディアル教育(やり直し教育)」(小野他, 2005)<sup>2)</sup>のあり方をどのように考えるかが大学教育

の抱える課題の1つとなっている。例えば、英語教育の専門誌である『英語教育』では2011年2月号で「英語のリメディアル教育を考える」というテーマが生まれ、議論されている<sup>3)</sup>。

中條・西垣(2007)では<sup>4)</sup>、上記で指摘されているような状況を、ある大学1年生の英語クラスについて、次のような実例をあげて報告した。受講者の英語力を日本英語検定協会が実施する英語能力判定テストにより算出された英検の級で表示すると、約50名の受講者の級構成比率は、準2級が8.7%、3級が39.1%、4級が21.7%、5級が23.9%、5級以下が6.5%であった。前述の戦略構想から言えば、高校卒業レベル(準2級～2級)に該当する学生は8.7%、中学卒業レベル(英検3級以上)に該当する学生は47.8%(8.7%+39.1%)で、残りの半数は中学卒業レベルにすら達していないということを報告し、現実を見据えた目標値を設定するならば、「大学卒業段階の目標」を「高等学校卒業段階の目標」に置き換える必要があるという実情を指摘した。

現在、日本の少なからぬ大学で英語関連科目を担当している教員は、「中学校の段階で身につけているはずであろう基礎英文法力が欠如している学生の多さに苦慮して

\*日本大学生産工学部教養・基礎科学系准教授

\*\*植草学園大学発達教育学部教授

\*\*\*千葉大学教育学部教授

いる」(間中, 2010: 21)<sup>5)</sup>。そして、「この『高いとはいえない』学力は、『漠然と』ではあるが、おそらく中学レベルの文法事項の一部から復習する必要があるだろうと考えるレベルである」(中井, 2008<sup>a</sup>: 178)<sup>6)</sup>。しかし、「小テストや定期試験の結果からだけでは、学生の英語の基礎学力レベルの実態がなかなか具体的に浮かびあがってこない。中学レベルの語彙や文法の知識が不足している学生が多いことは確かであるが、特に文法に関して、『どのあたりのことまで確実に理解でき、どういったことから知識が曖昧になっているのか』を把握することが非常に難しい」(中井 2008<sup>a</sup>: 179)<sup>7)</sup>。そのような実情に内心じくじたる思いがあるものの、解決の糸口を見いだせないというのが英語関連科目を担当している教員の現状と考えられる。

限られた教育環境の中でリメディアル教育を効率的に進めるためには、学力レベルの実態を具体的に把握することが必要なことはいまでもない。本研究では、上記で述べたような状況を踏まえて、中條・西垣 (2007)<sup>8)</sup>の予備研究を進めて、リメディアル・レベルと考えられる大学生の英語力を身近な英検で測定するとともに、中学・高等学校 (以下、中高) で学習した文法項目から基礎文法力テストを試作して、どの級レベルの受講者がどの文法項目をどの程度習得しているかの実態を調査することとした<sup>9)</sup>。本研究の調査結果は、今後リメディアル教育を効果的に進めるための、文法力測定テスト作成、教材作成のための基礎資料となると考える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、真に学習者のためになる英語教育の実現をめざして、今日の大学生の英語基礎学力の実態を把握するため、教育的視点に基づいた客観的な指標を用いてリメディアル学習者の英語習熟度を計測し、どのような英語習熟度の学習者が、どのような文法項目に、どの程度習熟しているかを調査することであった。

具体的な研究目的は以下のとおりである。1) 中高英語教科書にもとづいた英語基礎文法力テストを試作する、2) 英語能力判定テストを実施し、大学生の英語習熟度の実態を英検の「級」という身近な指標で把握する、3) 試作した英語基礎文法力テストを実施し、英検級別に受験者の文法項目問題別の正答率を分類して、級別の文法熟達度を見る。このようにして、リメディアル学習者の英語習熟度の一端を具体的に調査することであった。

## 3. 研究の方法

現実の大学生の基礎学力の実態をできるだけ客観的、

正確に把握するため、取得したスコアを英検に相当する級で表示することができる「英語能力判定テスト」を実施した。併せて、中学・高校で学習した文法項目の習得状況を調査するための「英語基礎文法力テスト」を試作し、2種類のテスト結果を合わせて、リメディアル学習者の英語習熟度と英語文法熟達度の調査を試行した。

### 3.1 英語能力判定テスト

英語習熟度の測定には、(財)日本英語検定協会で作成する英語能力判定テストを用いた。このテストは TOEIC<sup>®3)</sup>や TOEFL<sup>®4)</sup>と同様に項目応答理論に基づく絶対評価のスコアでテスト結果を表示することができ、異なる時期に異なる問題を受けても同じ尺度でスコアを比較することが可能である。このテストの最大の特徴は、テスト問題の難易度をあらかじめ4種類(A・B・C・D)に分けているため、能力に適した問題を使用することで、より正確な能力を測定でき、きめ細かなレベル分けができるとともに、取得したスコアがどの程度のレベルか把握する目安として、「あなたは準2級レベルの力があります」のように、スコアだけでなく、学習者に身近な実際の英検での級レベルを知ること、自分の英語力の位置付けの実感が高まることである。本研究では、計164人の調査対象者に対して、英検準2級、3級、4級の問題で構成された英語検定協会版プレースメントテストCを実施した。

### 3.2 英語基礎文法力テストの試作

中高英語教科書で扱われる、いわゆる「学校文法」(有村・天野, 1987: iv)<sup>9)</sup>や「学習英文法」(大津, 2011)<sup>10)</sup>の文法項目の例として、実際の中高英語教科書を参照して文法項目を作成した先行研究には、中学校文法項目については白畑 (2008)<sup>11)</sup>、高等学校文法項目については内堀・中條・長谷川 (2003)<sup>12)</sup>、Uchibori, Chujo, Hasegawa (2006)<sup>13)</sup>がある。また、中高両方の文法項目について調査したものには「文法項目別 BNC 用例集」(TUFSSano-Lab, 2005)<sup>14)</sup>や小野他 (2005)<sup>15)</sup>の英語文法問題中学・高校380問題 (非公開)がある。本研究では、文法項目策定の具体例や調査過程の詳細が具体的に記述されているという理由から、中学校文法項目については白畑 (2008)<sup>16)</sup>を、高等学校文法項目については内堀・中條・長谷川 (2003)<sup>17)</sup>にもとづいて英語基礎文法力テストを試作した。

白畑 (2008: 174) は<sup>18)</sup>、中学校英語教科書『Sunshine English Course (平成14年度版)』の3年生用の教科書の巻末にまとめられている「中学校の文・文型・文法のとめ」を参照して21の文法項目を調査対象とし、文法項目ごとに問題を作成して中学生の英語熟達度調査を行った。中学校英語教科書に扱われた文法項目として調査に使用された21項目は、代名詞、名詞複数形、属格 ('s), Be 動詞, Yes/No 疑問文, Wh 疑問文, 比較表現,

時制, 分詞(後置修飾), 現在進行形, *to* 不定詞, 受動態, 現在完了形, 関係代名詞, 否定形, 法助動詞, 存在構文, *it* (天候と時間表現), 接続詞, 間接疑問文の語順, *how to* であった。

内堀・中條・長谷川 (2003) は<sup>19)</sup>, 高等学校で指導される文法の例として, *Unicorn I, II* (文英堂), *Milestone I, II* (啓林館), *Polestar I, II* (数研) の3シリーズの高等学校教科書(2002年版)に扱われている文法項目の種類と説明行数を調査し, 説明行数が多かった33項目を明らかにした。33項目の高等学校英語教科書に扱われた文法項目は, 関係詞, 時制, 不定詞, 分詞, 仮定法, 態, 基本文型, 第2文型, 第5文型, *It* 主語構文, 動名詞, 句・節, 助動詞, 比較, 前置詞, 第3文型, 形式目的語, 譲歩, *S+seem+to* 不定詞, 倒置, 第4文型, 強調, 省略, *S+be+形容詞+that* 節, *S+V+O+to* 不定詞, 副詞, 接続詞, 間接話法, 否定, 文の種類, 存在構文, 分詞(現在・過去), 無生物主語であった。

本来は, 上述の中学校文法項目21項目と高校文法項目33項目のすべてに関するテスト問題を作成することが望ましい。しかしながら, これらの各項目はさらに下位区分されており, たとえば中学校21項目からなる白畑(2008)<sup>20)</sup>の実際の合計問題数は103問になっている。本研究においては, 中学に加えて, 高校文法項目も出題するため, 問題数が多くなり, 英語を苦手とする調査対象者が試験に取り組む意欲を喪失させてしまう可能性が予想された。そこで, テスト実施の実用的側面を重視し, 高校文法項目33項目から中学校に既出の16項目を除外した。その結果, 高校の文法項目は17項目に減じ, 中高文法項目は合計38項目となった。以下, 実際の基礎文法力テスト問題の試作について, 中学校, 高等学校別に述べる。

### 3.2.1 中学校文法熟達度テストの試作

中学校で学習した英文法をどの程度身につけているかを明らかにするために, 中学校文法熟達度テストで調査した項目は, 白畑(2008)<sup>21)</sup>の「中学3年生の英語(文法)熟達度」(以下, 白畑テスト)で用いられた21項目である。白畑テストでは, 21項目の下位区分の項目ごとに複数の問題が作成され, 合計103問であった。1人の調査対象者が受験するには問題数が多いため, 2分割してA版とB版に分けて実施された<sup>25)</sup>。本研究においても, 白畑テストと同一の21項目に関して, 「中学A」と「中学B」を50問ずつ作成した。本研究の各問題文は, 白畑テストを出発点にして試作を開始した。最終的に, 当該受験者の実情に合わせて, すべての問題文に何らかの変更を施したうえで, 中学校文法熟達度テストとした。以下では, 変更箇所がわかりやすいように, 同じ問題文を用いた例を挙げて説明する。

たとえば, 白畑テストでは, 受動態の習得状況を問う

設問は, 下記(1)のように下線形式で出題されている。本研究では, 高校文法に関する問題も合わせると, 出題数は中学のみの白畑テストを上回る。さらに, 下線形式の設問では下線部に何個の単語が入るかということも問われているため, 受験者の負担が大きい。それらの点を配慮して, 下線問題を(1')のように空所補充問題に変更し, ( )をつけて, 語数がわかるようにした。

(1) カナダでは英語が話されています。

English \_\_\_\_\_ in Canada.

(1') カナダでは英語が話されています。

English ( ) ( ) in Canada.

白畑テストでは, たとえば *Wh* 疑問文に関する設問として, (2)のように「疑問文+返答文」という2文からなる対話形式の出題が多い。このような対話形式の問題は, 質問内容を理解し, かつ適切な返答ができる能力を問うことが可能である。本研究では, 試験全体の問題数と, 問題文の理解に要する時間を考慮して, 対話形式を(2)のような質問文のみの1文形式に変更した。

(2) A: どのくらいひんばんに, 沖縄に行きますか?

B: 1年に1回です。

A: \_\_\_\_\_ do you go to Okinawa?

B: I go there once a year.

(2') どのくらいひんばんに, 沖縄に行きますか?

( ) ( ) do you go to Okinawa?

白畑テストでは, 「同一の問題文中に複数の調査項目が含まれていることもある」(白畑, 2008: 174)<sup>22)</sup>。たとえば, (3)の名詞複数形に関する設問では, 下線部分で名詞複数形と現在進行形の2つの項目が問われている。一方, 中学校文法熟達度テストでは, 1問で問う調査文法項目を1つにしぼることとし, (3)の問題文では(3')のように名詞複数形の1項目を問う問題文に変更した。

(3) たくさん子ども達が今プールで泳いでいます。

Many \_\_\_\_\_ in the pool now.

(3') たくさん子ども達が今プールで泳いでいます。

Many ( ) are swimming in the pool now.

以上のように中学文法熟達度テストは, 上記のような変更を加えた結果, 白畑テストよりも平易な問題になり, 英検4級や5級レベルの受験者にも心理的抵抗が少なく, 時間的にも実施が容易な問題となったと考える<sup>26)</sup>。

### 3.2.2 高校文法熟達度テストの試作

高等学校で学習した英文法をどの程度身につけているかを明らかにするために, 高校文法熟達度テストで調査する高校文法項目は, 内堀他(2003)<sup>23)</sup>の33項目から, 中学校文法項目21項目に既出の項目を除外して, 最終的に17項目となった。それらは, 関係詞, 分詞, 仮定法, 第5文型(SVOC), 動名詞, 助動詞, 前置詞, 形式目的語, 譲歩, *S+seem+to* 不定詞, 第4文型(SVOO), 強調, 副詞, 接続詞, 否定, *Wh* 語を含むいろいろな文, 無生物主

語である。これらの17項目について、上述の中学校文法熟達度テストと同形式の「高校A」30問、「高校B」の30問、合計60問の問題を試作した。

当該受験者のようなりメディアルレベルの学習者の苦手な文法項目として、中井(2008<sup>a</sup>)は<sup>24)</sup>、二重目的語と疑問詞が弱いことを指摘している<sup>25)</sup>。本研究では、その指摘を反映して、二重目的語文(SVOO)については、高校Aと高校Bに各1問ずつ、また、疑問詞の文については、*who*が主語として使われる場合と、*who*が目的語として使われる場合を、高校AとBにそれぞれ2問ずつ含めた。

以上のようにして、A4サイズで6ページの『A版』(中学A+高校A)の80問と、『B版』(中学B+高校B)の80問の2種類の中高文法熟達度テスト(以下、基礎文法力テスト)が作成された。

### 3.3 調査方法

調査対象者(以下、対象者)：2011年度に入学した私立大学の1年生、6クラス合計164名

テストの実施：英語能力判定テスト 2011年12月  
基礎文法力テスト 2012年1月A版 3クラス84名  
B版 3クラス80名に実施

基礎文法力テスト採点時の留意点：

- 1) スペリングミスは考慮に入れず正解とする。
- 2) 1つの問題に( )が複数個ある際には、すべて正解した時のみ正解とする。

基礎文法力テストの得点集計：正解は1、不正解は0としてエクセルで入力し、対象者の英検該当級と調査文法項目ごとの正答率を集計した。

## 4. 結果と考察

### 4.1 英語能力判定テストの結果

英語能力判定テストの結果は、2012年1月に、個人別成績表を対象者に手渡して通知した。対象者164名の平均スコアは570点満点中393点であった<sup>26)</sup>。Fig. 1には、級別の人数と割合を表示した。2級が9人(5%)、準2

級が39人(24%)、3級が76人(46%)、4級が34人(21%)、5級が6人(4%)であった。

文部科学省の言う「高等学校卒業者で準2～2級程度のレベル」という目標値を満たしている対象者は29%(2級5%+準2級24%)であり、それ以外のリメディアル学習者は71%であることが判明した。そのうち、「中学卒業者で英検3級程度」と評価されたりメディアル学習者については、次節で報告する高校文法項目で正答率の低い文法項目の習得に問題があると考えられる。また4級、5級と評価されたりメディアル学習者については、中学文法項目で正答率の低い文法項目が問題となると考えられる。こうした学習者に対する指導の方法を考える必要があることが明らかとなった。

### 4.2 英検級別に見た基礎文法力テストの結果

基礎文法力テストは、採点后、対象者の要望に応じて、翌週の授業時に解答と解説を行った。その際、本研究で試作した基礎文法力テストは、対象者に心理的負担の重くない、適切なレベルのテストであるとの感触が得られた。また、各問は、日本語訳付きの空所補充問題であったため、模範解答から乖離した解答は少なく、採点は比較的容易であった。今後は、当該テストを基礎文法力診断テストとして年間計画に組み込み、テスト結果をクラス内の指導だけでなく、対象者の英語学習カルテとして自己学習にも有効に活用したいと考えている。

Table 1に、英語能力判定テストと基礎文法力テストの両方を受けた対象者161名の基礎文法力テストの正答率を英検級別に示した。テスト結果は、縦軸に中学と高校の文法項目を、横軸に英検の級別正答率を表示した。中段に中学校の21の文法項目の平均正答率、下段に高校17文法項目の平均正答率を示し、最下段に中学と高校を合わせた38の文法項目の平均正答率を英検級別に表示した。

中学校の基礎文法項目21項目の平均正答率は73%、受験者の該当英検級別に正答率を見ると、2級92%、準2級85%、3級75%、4級53%、5級39%であった。高校の基礎文法項目17項目の平均正答率は45%、受験

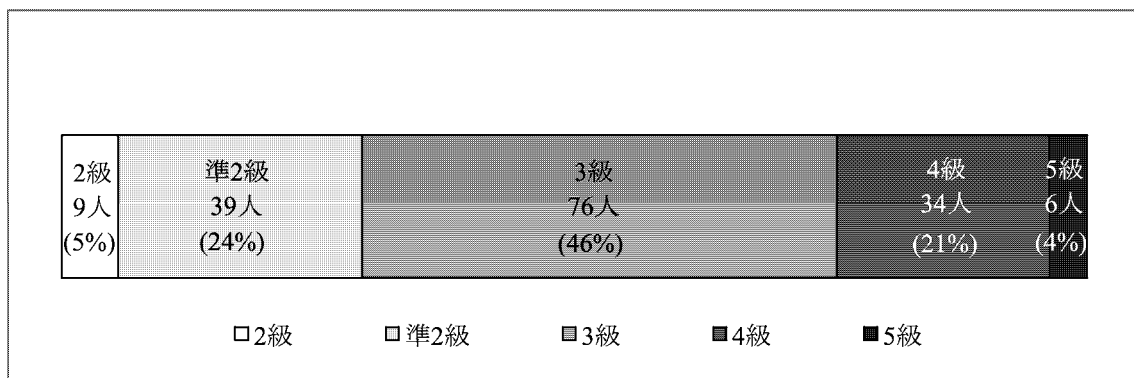


Fig. 1 EIKEN Test Results

Table 1 Grammar Test Results

文法項目		英検級該当者の正答率 (%)					平均 正答率 (%)	
		2 級	準 2 級	3 級	4 級	5 級		
中学 文法 項目	1	代名詞	97	93	89	80	58	88
	2	名詞複数形	83	71	57	37	17	56
	3	属格 ( 's)	89	82	55	12	0	53
	4	be 動詞	93	94	91	85	70	90
	5	Yes/No 疑問文	91	82	78	61	41	76
	6	Wh 疑問文	99	96	92	72	61	88
	7	比較表現	94	87	85	54	20	78
	8	時制	82	81	67	43	19	66
	9	分詞 (後置修飾)	94	92	77	60	42	77
	10	現在進行形	100	92	78	59	33	78
	11	to 不定詞	100	92	83	58	44	81
	12	受動態	89	74	64	26	33	59
	13	現在完了形	81	75	58	25	11	57
	14	関係代名詞	100	93	77	58	50	77
	15	否定形	56	70	66	53	29	63
	16	法助動詞	100	88	78	58	56	79
	17	存在構文	100	85	74	20	17	66
	18	it (天候と時間表現)	100	84	68	76	83	76
	19	接続詞	100	100	97	87	75	94
	20	間接疑問文	78	74	59	32	33	58
	21	how to	100	87	74	50	33	73
中学平均		92	85	75	53	39	73	
高校 文法 項目	1	関係詞	67	59	35	16	17	39
	2	分詞	78	79	74	54	28	69
	3	仮定法	22	38	22	3	0	21
	4	第 5 文型 (SVOC)	56	53	62	41	33	54
	5	動名詞	89	87	58	34	33	61
	6	助動詞	78	68	58	29	33	55
	7	前置詞	44	47	48	19	8	40
	8	形式目的語	67	45	42	18	17	38
	9	譲歩	0	18	22	3	0	15
	10	S + seem + to 不定詞	33	37	24	3	0	22
	11	第 4 文型 (SVOO)	100	76	57	21	50	56
	12	強調	56	47	35	9	17	33
	13	副詞	67	68	67	49	25	62
	14	接続詞	78	68	53	19	17	50
	15	否定	74	66	52	24	0	49
	16	wh 語を含むいろいろな文	85	89	63	41	28	65
	17	無生物主語	78	61	26	3	0	33
高校平均		63	59	47	23	18	45	
全体平均		79	74	62	39	30	60	

者の該当英検級別に正答率を見ると、2級63%、準2級59%、3級47%、4級23%、5級18%であった。中学と高校を合わせた38項目の平均正答率は60%、受験者の該当英検級別に正答率を見ると、2級79%、準2級74%、3級62%、4級39%、5級30%であった。

Table 1 に示した結果から以下のことが判明した。

- ① 中学校レベルと高校レベルの文法問題のそれぞれの平均正答率を見ると、中学校が73%、高校が45%である。高校レベルの文法問題では、正答率は中学レベルより大きく下がって45%であることから、高校で学習する文法内容の半分が定着していないことがわかる<sup>※9)</sup>。
- ② 中学校レベルと高校レベルの文法問題のうち正答率が50%以下になっている項目数を比較すると、中学校では21項目中0、高校では17項目中9項目であることから、対象者全体を見た場合、高校で扱う文法項目に習得上の困難が集中しているのではないかと考えられる。
- ③ 中学校レベルと高校レベルの両方において、2級正答率から5級正答率までを見ると、2級から5級に向けて正答率が下がるという右肩下がり傾向があることから、英検の級別の振り分けと基礎文法力テスト問題の試作がほぼ適正に行われているのではないかという妥当性が認められる。
- ④ 中学校レベルと高校レベルを、2級から5級までの級別正答率で見ると、中学校と高校の両方で、4級と5級に判定された対象者の正答率が低く、特に5級と評価された対象者が低くなっている。これらの対象者(すなわち英語の学力の低い大学生)は、中学校で習得すべき文法項目が十分理解できていないことに、つまり原因があると考えられる。
- ⑤ 中学校レベルの文法項目を見ると、正答率が90%を超える理解、定着の高い文法項目があれば、反対に低い文法項目もある。文法項目によっては重点的に復習が必要な項目があることがわかる。重点的な復習が必要な項目には、例えば、名詞複数形、属格、受動態、現在完了形、間接疑問文等がある。一方、be動詞、接続詞等は、おおむね定着していると言えそうである。
- ⑥ 高校レベルの文法項目を見ると、正答率が60%を超えているのは分詞、動名詞、副詞、Wh語を含むいろいろな文のみである。その他の項目は軒並み60%を割っている。習得率が2割、3割という項目も多い。そのような項目には、仮定法、譲歩、S+seem+to不定詞、強調構文、無生物主語等がある。

現行指導要領のもとで、これらの高校初出の文法項目は、初出の時期が遅いために、そうした項目を含む文との接触の頻度が少ないことが正答率の低い原因とも考えられる。これらの文法項目の例文に集中的に触

れて、familiarity を高めることは文法習得の有効な手段となるであろう。

さらに、これらは、日本語の文法体系からは馴染みにくいものであったり、特に注意が必要な項目に該当する。日本人が言語体系の異なる英語を学習する際に、特に努力をして習得しなければならない項目であると言える。

- ⑦ 今回の調査結果により、英検の級別の振り分けによる英語習熟度に応じて、それぞれに英語の文法項目の弱点が明らかとなったことから、リメディアル教育として、英語習熟度に合った適切な指導が可能になるのではないかと考えられる。

Table 1 は、今回調査した38の文法項目ごとに正答率を集計したものである。文法問題は38の項目の下位区分ごとに作成されており、Appendix には、下位区分ごとの正答率を集計したものを付した<sup>※10)</sup>。これを参照すると、各文法項目の内訳に沿って、さらに以下のようなことが明らかになった<sup>※11)</sup>。

- ⑧ 上記②において、文法項目の下位区分ごとに詳細に見ると、中学校レベルの文法項目のうち、正答率が50%以下になっている3項目は、規則形(*apples*, *two hours*), *Shall I ...?*, *not ... either* であった。規則形は、*Do you like (apples)?* など一般的に述べる場合の複数形(*apples*)、および、*I watched TV for two (hours) last night.* など単・複の使い分け(*two hours*)という日本人には馴染みのないものである。*Shall I ...?* は慣用句として使用されるもの、*not ... either* は *not ... any* などと同じように覚えておかなければならない関連語句と言える。いずれも、大学入試問題としても出題される文法項目であり、対象者全体に正答率が低かったのはその難易度とも関係があるかもしれない。

上述の3項目も含めて、3級の正答率が50%以下の項目に関して、語彙の意味(や使用法)が関与するような項目(例えば、*Shall I ...?*、現在完了形の継続用法)と、どちらかと言うと文法機能中心の項目(例えば、属格、*Were ...?*、時制の一致、*not ... either*)とでは、誤りの原因の質が違うように思われる<sup>※12)</sup>。そのため、指導の際には注意が必要である。

- ⑨ 名詞複数形については、どの級でも「規則形」の方が「不規則形」より正答率が低い。これは、教科書で習った順番で文法形態素が習得されているわけではないことを意味する。また、動詞の時制については、準2級から5級までは、「規則過去形」の方が「不規則過去形」よりも正答率が高い。これは、不規則変化形の方が日本人英語学習者の習得順序では早いとする白畑(2004)<sup>25)</sup>の主張とは異なる。これらが意味するところは、いわゆるパターン・プラクティスだけでは、特定

の形態素や構造の習得が完成したとは言えないということであろう。

- ⑩ 高校レベルの文法項目で正答率が低い(3級で50%以下)問題は、英文法の基礎知識の暗記だけではなかなか正解が得られない種類の問題であると言える。一般的にとらえられる難易度に反して、第5文型(SVOC)の正答率が第4文型(SVOO)よりも高いが、これは、後者はテストで動詞部分も空所になっていたことが原因であると考えられる。
- ⑪ 分詞の限定用法(名詞を修飾する用法)のうち、過去分詞形のほうが現在分詞形よりも、正答率がどの級においても低かった。これは、自動詞と他動詞の概念、区別の難しさを反映していると考えられる。また、分詞の叙述用法(名詞の補語として使われる用法)は、どの級においても限定用法(現在分詞による)よりも正答率が高い、ということにはなかった。これは、補語(補文)の役割を理解していないことがその大きな理由であろう。今後は、自動詞と他動詞といった概念の理解、補文形式や動詞と補文構造に関する理解を高める努力や工夫をする必要があると考えられる。

## 5. まとめ

入試方法が多様化する今日、大学では新入生の英語学力の低下、また、英語学力格差の拡大という傾向がますます強くなることが予想される。そのため、大学での授業本来の目標を達成するためには、中学校、高校段階の「学び直し」を中心とした「リメディアル教育」のあり方をどう考えるかが大学教育における重要な課題となっている。限られた学習時間、教育環境の中でリメディアル教育を効率的に進めて、真に学習者のためになる実践的な英語教育をめざすためには、現実の大学生の基礎学力の実態を把握することは不可欠である。

本研究では、教育的視点にもとづいた客観的な指標を用いてリメディアル学習者の英語習熟度を計測した後、どの英語習熟度レベルの学習者が具体的にどの文法項目をどの程度習得しているかを、基礎文法力テストを試作して調査した。その結果、リメディアル学習者が、特に文法に関して、どの項目あたりまで確実に理解でき、どの項目の知識が曖昧になっているのかを、ある程度具体的に把握することができた。とりわけ、高校レベルの文法項目の習得率の低さは深刻な課題であり、「学び直し」の必要性が具体的に確認できた。

今回の調査は、リメディアル教育を効果的に行うための教材開発に向けた予備的研究の1つという位置付けである。本研究で得られたリメディアル学習者についての具体的な知見は、本研究の試用試験の範囲内に限られている。今後、本研究の結果にもとづいて試作した基礎文

法力テストの問題を精選、改良して、当該調査対象者よりも英語習熟度の低いあるいは高い大学生にも受験可能なテストを作成して、追調査を行い、引き続き調査を継続していく予定である。

リメディアル教育で使用する教材に関して、酒井(2005:107)<sup>26)</sup>は「去年から今年にかけて、一見中学生用の教材かと見間違ふような大学生用の教材が多く大学の採用された。中学から学ぶ英文法が簡単な単語を使った構文で説明してあり、練習問題も中学生用の問題と同等である。習熟度が低い学習者に対しては、教材のレベルを低くすることは当然のことだ。しかし、それだけでは、中学や高校で彼ら彼女らが受けてきた授業を繰り返すことにしかならない。」と、ただの「やり直し」では効果が期待できないことを指摘している。阿野(2009:35)<sup>27)</sup>も、「学生の多くは文法学習、文法用語に強いアレルギーを持っている。5文型から始まるワークブックを与えて順番にこなしていくだけでは、『またこれか、やっぱり英語はいやだ』とってしまう」とただの「やり直し」では嫌いになった原因を繰り返すことになり、従来とは異なる方法で学ぶ「学び直し」の重要性を指摘している。

多数の研究者がリメディアル教材について意見を表明しているものの、田原(2011:28)<sup>28)</sup>が、「リメディアル教育用に既製教材をいろいろ探したが、問題数の少なさや、ある程度の英語力を前提にしている等で、満足のゆくものが見つからなかった。」と述べているように現状では適切な教材が不足している。

日本リメディアル教育学会の第1回全国大会講演資料集の巻頭言で小野(2005:i)<sup>29)</sup>は、リメディアル教育で成功した事例に言及して、「中学校や高校で経験したことがない新鮮な学習方法を体験させ学生を大きく成長させている。」「学生も中学や高校で経験していない学習であれば、抵抗感もなく素直に実行する。」「このように、自分が発見したことは身につく、やる気になることが大学教育の場面で証明されている。」とリメディアル教育で成果を上げる鍵として、中高で経験したことのない「新鮮な学習方法」「自分で発見」することの重要性を指摘した。

現在、我々の研究チームでは、小野(2005)<sup>30)</sup>が言う、「新鮮な学習方法」「発見学習」のひとつとして、コーパス言語学の研究成果を活用してリメディアル・レベルの学習者向けの教材・指導法の開発を行っている。本研究の成果は、リメディアル・レベル学習者向けの教材を開発する際の基礎的研究資料となるものであり、引き続き、調査研究を継続していきたいと考える。

謝辞：本研究の一部は平成21-24年度科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号21320107)を受けて行われました。

## 注

- 注 1) 文部科学省初等中等教育局国際教育課「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想の策定について(2002年7月12日)[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm)
- 注 2) 酒井他(2010)<sup>31)</sup>、酒井(2011:10)<sup>32)</sup>は、「英語が苦手な大学生が、中高と6年間も英語を勉強しても、基礎的な文法や単語を身につけていない原因は、メタ認知能力が弱いからだろう」と述べている。英語リメディアル研究の専門家として、「当初、文法を学ばせればよいと思った」酒井は、「文法力補習の考えは一定の効果をあげた」後、「次は学習者自律が重要だと思った」としている。本研究では、酒井のたどった道筋を追認することになるかもしれないが、まず、基礎的な文法のどの部分をリメディアル・レベルの大学生が身につけているのかいないのかの現状把握から一歩ずつ明らかにしていくことにした。
- 注 3) TOEICはTest of English for International Communicationの略称。[\(http://www.toeic.or.jp/\)](http://www.toeic.or.jp/)
- 注 4) TOEFLはTest of English as a Foreign Languageの略称。[\(http://www.cieej.or.jp/toefl/\)](http://www.cieej.or.jp/toefl/)
- 注 5) 白畑(2008:174)<sup>33)</sup>では、「問題数は全部で70問」と記されているが、問題例(pp.174-184)には103問が列挙されている。
- 注 6) 今後、問題文を精選して改良する必要があるため、本稿では問題文の公表を差し控えることにした。
- 注 7) リメディアル学習者の意識調査を実施した中井(2008<sup>b</sup>:41)<sup>34)</sup>では、「自分の英語力が伸びていないと感じている学生の大多数は、同時に、文法ができなかった、英語に興味がわかなかったと回答していることから、やはり、『文法の復習』はリメディアル型の英語教育の『要』だと位置づけられる」と指摘している。
- 注 8) 対象者のスコアは、230点から565点の間に分布した。
- 注 9) 文法力は語彙力と並んで英語力の基礎である。文法事項の習得が低いにも関わらず、大学教育をその上に積み上げるのは砂上の楼閣である。不安定な基盤のうえで大学生に英語を使用させていることになる。リメディアル教育が必要とされる所以である。
- 注 10) 基礎文法テストでは、各文法項目の下位区分について、出題数は1問から2問に限定されている、

問題文によって難易度の差はあり、( )で問う部分によっても難易度の差は生じる。今回の結果は、試用した問題についてのみに言えることではあるが、文法項目別の習熟度についてある程度の傾向はわかる。

- 注 11) 白畑(2008)<sup>35)</sup>では、下位区分ごとの正答数が報告されている。本研究で試作したテストは、問題形式は白畑テストと同じではないが、文法項目とその下位区分は同じものを用いている。今回試作した基礎文法力テストの試用試験結果の詳細な分析は別の機会に行う予定である。白畑テストの調査対象者の静岡県中学3年生225人の調査結果と比較すれば、さらに興味深い知見が得られると考えられる。
- 注 12) 白畑(2004)<sup>36)</sup>は、時制辞や進行相のbeなどは、文法機能を担う語として、「語彙範疇」(名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞)と対比される「機能範疇」に属すると考えている。そして、機能範疇に属する項目は、学習する際に否定証拠を用いてもあまり効果的でないと言主張する。しかし、現在完了形(継続)の問題でhas been livingとの誤答が散見されたのだが、これは英語表現としては誤りではなく、この現在完了の継続用法などは、(日本人)英語学習者でも習得がかなり早い進行形と関係ある表現であること、また、日本語の表現構造「～ている」の持つ特徴とを考え合わせても、語彙の意味が強く関与していると言ってよいと考える。

## 参考文献

- 1) 小野博, 村木英治, 林規生, 杉森直樹, 野崎浩成, 西森年寿, 馬場真知子, 田中佳子, 國吉丈夫, 酒井志延, 「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育」, 『NIME 研究報告』, 6, 2005, 1-147.
- 2) 小野他(2005), 前掲論文.
- 3) 大修館書店, 「英語のリメディアル教育を考える: 大学での取り組み・高校からの見方」, 『英語教育』, 59(12), 東京, 大修館書店, 2011.
- 4) 中條清美, 西垣知佳子, 「リメディアル教育用英語検定学習教材の試用」『日本大学生産工学部研究報告 B(文系)』, 40, 2007, 47-53.
- 5) 間中和歌江, 「基礎レベルの大学生に中学生を指導させる試み」, 『リメディアル教育研究』, 5(1), 2010, 21-27.
- 6) 中井延美, 「大学英語クラスにおけるリメディアル教育の研究: 基礎文法理解度の診断テストを用いて」, 『明海大学外国語学部論集』, 20, 2008<sup>a</sup>, 177-186.
- 7) 中井延美(2008<sup>a</sup>), 前掲論文.



- 8) 中條清美, 西垣知佳子 (2007), 前掲論文.
- 9) 有村兼彬, 天野政千代, 『英語の文法: 英語学入門講座・第8巻』, 東京, 英潮社, 1987.
- 10) 大津由紀雄, 「慶応義塾大学 COE・PLT 英語教育シンポジウム: 日本人の英語学習にふさわしい英文法の姿を探る」, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2011年9月10日.
- 11) 白畑知彦, 「小学生と中学生の英語熟達度調査」, 小池生夫 (編), 『第二言語習得研究を基盤とする小, 中, 高, 大の連携をはかる英語教育の先導的研究』 (平成16~19年度科学研究費補助金 基盤研究 (A) 研究成果報告書), 2008, 166-190.
- 12) 内堀朝子, 中條清美, 長谷川修治, 「初級レベル学習者の実用英語コミュニケーション能力を高める文法指導に関する研究」, 第42回大学英語教育学会全国大会, 東北学院大学, 2003年9月5日.
- 13) Uchibori, A., Chujo, K. and Hasegawa, S., Towards Better Grammar Instruction: Bridging the Gap between High School Textbooks and TOEIC, *Asian EFL Journal*, 8(2), 2006, 228-253.
- 14) TUFUS Sano-Lab, 「文法項目別 BNC 用例集」, 2005, <http://scn.jkn21.com/ncube/n-cube.usage.html>.
- 15) 小野他 (2005), 前掲論文.
- 16) 白畑知彦 (2008), 前掲論文.
- 17) 内堀朝子, 中條清美, 長谷川修治 (2003), 前掲論文.
- 18) 白畑知彦 (2008), 前掲論文.
- 19) 内堀朝子, 中條清美, 長谷川修治 (2003), 前掲論文.
- 20) 白畑知彦 (2008), 前掲論文.
- 21) 白畑知彦 (2008), 前掲論文.
- 22) 白畑知彦 (2008), 前掲論文.
- 23) 内堀朝子, 中條清美, 長谷川修治 (2003), 前掲論文.
- 24) 中井延美 (2008<sup>a</sup>), 前掲論文.
- 25) 白畑知彦, 『英語習得の「常識」「非常識」: 第二言語習得研究からの検証』, 東京, 大修館書店, 2004.
- 26) 酒井志延, 「“Bridging”の教材開発について」, 小野博他 (編), 「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育」, 『NIME 研究報告』, 6, 2005, 107-113.
- 27) 阿野幸一, 「大学での授業開き: 教養英語の最初の授業」, 『英語教育』, 58 (1), 2009, 34-35.
- 28) 田原博幸, 「児童繰り返し学習機能付き e ラーニングの有効性」, 『英語教育』, 59 (12), 2011, 28-30.
- 29) 小野博, 「日本リメディアル教育学会第1回全国大会の開催によせて」, 『日本リメディアル教育学会第1回全国大会講演資料集』, 2005, i-ii.
- 30) 小野 (2005), 前掲論文.
- 31) 酒井志延, 中西千春, 久村研, 清田洋一, 山内真理, 間中和歌江, 合田美子, 河内山晶子, 森永弘司, 浅野享三, 城一道子, 「大学生の英語学習の意識格差についての研究」, 『リメディアル教育研究』, 5 (1), 2010, 9-20.
- 32) 酒井志延, 「リメディアルと向き合う」, 『英語教育』, 59 (12), 2011, 10-12.
- 33) 白畑知彦 (2008), 前掲論文.
- 34) 中井延美, 「リメディアル型授業に対する学習者の意識調査: 大学英語クラスにおいて」, 『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』, 41, 2008<sup>b</sup>, 35-41.
- 35) 白畑知彦 (2008), 前掲論文.
- 36) 白畑知彦 (2004), 前掲書.

(H 24. 2 .10 受理)

Appendix Grammar Test Results for Each Distinct Grammar Item

文法項目			英検級該当者の正答率 (%)					平均 正答率 (%)	回答数	
			2級	準2級	3級	4級	5級			
中学 文法 項目	1	代 名 詞	主格	100	95	99	100	100	98	165
			所有格	89	92	89	88	67	89	165
			目的格	100	97	92	82	33	90	165
			独立所有格	100	87	76	50	33	73	165
		項目平均	97	93	89	80	58	88	165	
	2	名 詞 複 数 形	規則形	78	61	43	3	0	40	165
			不規則形	89	82	70	71	33	73	165
		項目平均	83	71	57	37	17	56	165	
	3	属格 ('s)	89	82	55	12	0	53	165	
	4	be 動詞	<i>am</i>	100	97	96	91	83	95	165
			<i>is</i>	100	97	97	97	100	98	165
			<i>are</i>	100	100	93	79	50	91	165
			<i>was</i>	78	89	77	79	50	80	165
			<i>were</i>	89	84	89	76	67	85	165
		項目平均	93	94	91	85	70	90	165	
	5	Yes/No 疑問文	<i>Is ...?</i>	100	93	95	87	67	92	83
			<i>Are ...?</i>	100	100	97	82	33	94	82
			<i>Was ...?</i>	100	87	85	65	33	78	83
			<i>Were ...?</i>	86	87	40	36	0	57	82
			<i>Do ...?</i>	100	93	95	87	67	92	83
<i>Does ...?</i>			86	83	71	45	67	72	82	
<i>Did ...?</i>			100	87	87	57	33	77	83	
<i>Can ...?</i> (能力)			100	91	94	73	33	89	82	
<i>Shall ...?</i> (依頼)			50	33	41	35	33	37	83	
<i>May ...?</i> (依頼)			86	78	91	64	67	83	82	
<i>Will/Be going to ...?</i>		89	74	62	38	17	60	165		
項目平均	91	82	78	61	41	76	90			
6	Wh 疑問文	<i>What ...?</i>	100	100	97	100	100	99	83	
		<i>What time ...?</i>	100	100	91	73	33	90	82	
		<i>Where ...?</i>	100	100	100	96	100	99	83	
		<i>Who ...?</i>	100	100	100	73	100	96	82	
		<i>Whose ...?</i>	100	80	69	35	33	61	83	
		<i>When ...?</i>	100	100	100	91	67	98	82	
		<i>Which ...?</i>	100	100	100	87	67	95	83	
		<i>Why ...?</i>	100	100	100	91	67	96	83	
		<i>How old ...?</i>	100	100	94	73	67	93	82	

文法項目			英検級該当者の正答率 (%)					平均 正答率 (%)	回答数	
			2級	準2級	3級	4級	5級			
中学 文法 項目		<i>How much ...?</i>	100	93	92	70	33	84	83	
		<i>How often ...?</i>	86	83	63	9	33	63	82	
		<i>How many ...?</i>	100	100	92	70	33	86	83	
		項目平均	99	96	92	72	61	88	83	
	7	比較表現	同等表現 ( <i>as tall as</i> )	100	91	100	82	67	93	82
			比較級 ( <i>taller than</i> )	100	93	92	70	0	83	83
			比較級 ( <i>more beautiful than</i> )	86	96	91	36	33	83	82
			最上級 ( <i>the highest</i> )	100	67	59	57	0	59	83
			最上級 ( <i>the most interesting</i> )	86	87	83	27	0	73	82
	項目平均		94	87	85	54	20	78	82	
	8	時制	三単現	78	82	62	41	17	62	330
			規則過去形	78	97	78	53	33	76	165
			不規則過去形	81	84	73	44	11	69	247
			条件節	89	79	77	50	33	71	165
			時制の一致	86	65	43	27	0	50	82
	項目平均		82	81	67	43	19	66	198	
	9	分詞 (後置修飾)	現在分詞の形容詞的用法	89	89	69	53	33	70	165
			過去分詞の形容詞的用法	100	95	85	68	50	83	165
		項目平均		94	92	77	60	42	77	165
	10	現在進行形		100	92	78	59	33	78	165
	11	to 不定詞	名詞的用法	100	100	95	91	33	93	83
			形容詞的用法	100	96	74	18	67	76	82
			副詞的用法	100	80	79	65	33	75	83
	項目平均		100	92	83	58	44	81	83	
12	受動態		89	74	64	26	33	59	165	
13	現在完了形	経験	71	78	66	18	0	61	82	
		完了	100	73	64	39	0	58	83	
		継続	71	74	43	18	33	51	82	
	項目平均		81	75	58	25	11	57	82	
14	関係代名詞	主格	100	87	74	52	67	70	83	
		目的格	100	100	80	64	33	84	82	
	項目平均		100	93	77	58	50	77	83	
15	否定形	<i>don't</i>	89	79	82	82	50	81	165	
		<i>doesn't</i>	50	100	95	70	67	87	83	
		<i>didn't</i>	86	87	80	55	0	77	82	
		<i>not ...either</i>	0	13	8	4	0	7	83	
	項目平均		56	70	66	53	29	63	103	

文法項目			英検級該当者の正答率 (%)					平均 正答率 (%)	回答数	
			2級	準2級	3級	4級	5級			
中学 文法 項目	16	法助動詞	<i>can</i> (能力)	100	96	91	82	67	91	82
			<i>may</i> (許可)	100	73	67	65	67	69	83
			<i>must/have to</i> (義務)	100	96	77	27	33	77	82
		項目平均			100	88	78	58	56	79
	17	存在構文	肯定文	100	87	87	30	33	70	83
			疑問文	100	83	60	9	0	62	82
		項目平均			100	85	74	20	17	66
	18	<i>it</i> (天候と時間表現)		100	84	68	76	83	76	165
	19	接続詞	<i>if</i>	100	100	99	91	83	97	165
			<i>when</i>	100	100	95	83	67	92	83
		項目平均			100	100	97	87	75	94
	20	間接疑問文		78	74	59	32	33	58	165
	21	<i>how to</i>		100	87	74	50	33	73	165
	中学平均			92	85	75	53	39	73	131
高校 文法 項目	1	関係詞		67	59	35	16	17	39	330
	2	分詞	現在分詞の限定用法	89	97	88	71	33	85	165
			過去分詞の限定用法	56	61	65	47	17	57	165
			分詞の叙述用法	89	79	70	44	33	67	165
		項目平均			78	79	74	54	28	69
	3	仮定法		22	38	22	3	0	21	330
	4	第5文型 (SVOC)		56	53	62	41	33	54	165
	5	動名詞		89	87	58	34	33	61	495
	6	助動詞		78	68	58	29	33	55	165
	7	前置詞		44	47	48	19	8	40	330
	8	形式目的語		67	45	42	18	17	38	165
	9	譲歩		0	18	22	3	0	15	165
	10	<i>S + seem + to</i> 不定詞		33	37	24	3	0	22	165
	11	第4文型 (SVOO)		100	76	57	21	50	56	165
	12	強調		56	47	35	9	17	33	165
	13	副詞		67	68	67	49	25	62	330
	14	接続詞		78	68	53	19	17	50	330
15	否定		74	66	52	24	0	49	495	
16	<i>wh</i> 語を含むいろいろな文		85	89	63	41	28	65	495	
17	無生物主語		78	61	26	3	0	33	165	
高校平均			79	74	62	39	30	60	272	
全体平均			79	74	62	39	30	60	201	